

《本号の表紙絵》

幻の外科免許状の写真

(Académie Nationale de Médecine, Ms 542(126)/Fol.2)

1660年代から約20年にわたり出島商館医が交付した外科修業証書(免許状)は、初期紅毛流医術の普及史における極めて重要な史料である。その中で、阿蘭陀通事西吉兵衛(玄甫, 1636~1684)が1668年2月20日に授与されたものはその形式と内容において抜きん出ている。通常は商館医が作成する証書を、このときは商館長ランストが自ら執筆し、受取人の長年にわたる努力とその成果を讃え、「Kitzibeoye」がそれまでの修業者を凌ぎヨーロッパ人医師と同等の実力を有していることを強調し、東インド会社の印章(ノータリーシール)を付し、名字Ranstのあとに自筆署名を示すヨーロッパ風の花押(manu propria)を付けるほど証書の形式に注意を払っている。蘭文の写真は、Kleiweg de Zwaan『Völkerkundliches und Geschichtliches über die Heilkunde der Chinesen und Japaner』(1917)及び古賀十二郎の『西洋医術伝来史』(1942)に掲載されているが、両者ともその出典を明らかにしていない。

明治期の資料を調査する中で筆者は、その暗闇に多少の光をもたらす新資料を発見した。1882年6月25日付のJournal de Thérapeutiqueにおいて、日本における牛痘接種を紹介したフランス一等海軍医アルドゥアン(Leon Ardouin)が、横浜在住のオランダ人医師ヘルツ(Anton Johannes Cornelius Geerts)のところで見た、商館長と医師の署名が入った1668年の「diplôme de médecin」についても言及している。同様の記述は、アルドゥアンの『日本における医学史の概観』(Aperçu sur l'Histoire de la Médecine au Japon. Paris, 1884, p.26)にも確認できる。1882年12月25日、駐日フランス公使ジュスラン(Jules Jouslain)は、この「diplôme」の写真及び説明文をフランス医学界の巨匠ラーレー伯爵(Félix Hippolyte Larrey, 1808-1895)に送り、ラーレー伯爵が1883年10月16日に行った報告は医学院の紀要に掲載された¹。それによれば、所有者の海軍軍医総監「Fotsuka Buskai」(戸塚文海)は、「diplôme」を父・静海から受け継いだとのことであるが、江戸の三大蘭方医に数えられた戸塚静海(1799-1876)が西玄甫の修業証書を入手した経緯や、その後の原本の行方は不明である。現存する最古の関連資料は、Académie Nationale de Médecineが保管している写真のみで、1882年にパリに送られたものである。

(ヴォルフガング・ミヒェル)

i Bulletin de l'Académie de Médecine, 46ème année, pp. 1204-1206